

プロローグ リーリのいじり

リーリは、ぼくのお祖父さんだ。エーバは、お祖母さん。

ぼくの友だちのほとんどは、お祖父さんをジージ、お祖母さんをバーバと呼んでる。でも、ぼくが赤ん坊のときから、お祖父さんはリーリで、お祖母さんはエーバだ。

リーリの名前は井上理一、エーバは井上英子。二人はママの両親なんだ。

ママの話だと、ジージやバーバじゃ年寄りっぽいからって、リーリがかってにそう決めたんだそうだ。まったく、おかしなことばっかり言ってるリーリらしいや。

じつは、ぼくも、このほうがいいと思ってる。だって、パパの両親をジージ、バーバと呼んでるんで、どっちも同じだとまちがえそうだから。ジージとバーバは、そう呼ばれても、老人っぽくていやだななんて思っちゃいけないらしい。

こないだリーリンちへ遊びに行ったとき、なんとなくリーリの頭を見たら、前よりすいぶん白髪がふえたように思ったんで、聞いてみた。

「ねえ、リーリ、どうして年をとると髪の毛が白くなるのっ」

する。リーリはすきと口をゆがめて見せてくれた。

「髪を染めやすくなるためだよ。今は金色が茶色にしまわかって思ってたんだ」
と言って、自分の白髪をたいせつそうになぞった。

あぶなく信じちゃうとこだった。

でも、リーリが金髪や茶髪になったら、こっちがはすかしくて見てらんないなって
思っ、すぐでたらめだっ、わかった。じっさい、ほくも口いよなあ。いつもリー
リにや、かんたんに引っかけられちゃうんだもの。

リーリんちが大きくて、部屋の数もぼくんちの倍くらいはある。広い庭は、ほとん
どが芝生で、リーリがゴルフの練習をするようになってる。

エーバは、ほくの顔を見るたびに、

「お手入れがたいへんなのよ、手伝ってちょうだい」
と、いつも言ってる。

五年前までお手伝いさんがいたけど、結婚してやめちゃったんだそうだ。それから
リーリとエーバは、広い家に二人きりで暮らしてるわけだ。

リーリは会社の仕事が忙しくて、めったに家にはいないらしい。でも、ほくが遊び
に行くとき、前もって言っとけば、ちゃんと待っててくれる。

テーブルの上にひろげた書類から目上げて、ちらっとほくを見ながら、

「やあ、きたな。……どうして、真也くん？」

と、まじめな顔でリーリは言うんだ。

「おちんちゃんに、ヒゲは生えたかね？」

まいっちゃんよ、ほんと。小学五年生の孫に聞くことかねえ。こんなお祖父さんって、ほかの家にもいるのかな？

でも、負けてらんないから、ぼくは平気な顔で答える。

「それが、まだなんだ。生えてきたら、すぐ知らせるね」

まるで種をまいた朝顔の話でもしてるみたい。

まったく、ぼくも、なんちゅう孫だ。

リーリんちには犬がいるんだ。長い茶色の毛で全身がおおわれて、耳も尻尾もふさふさしている。チビって名前なんだけど、身体はすごくでかい。

リーリの話によれば、きつと「ゴールデン・レトリバー」の系統なんだろうって。

いつも玄関の前で待っていて、いきなりじゃれて飛びついてくる。ぼくは、あまりの大きさに圧倒される。なにしろ立ち上がると、ぼくの身長より高いんだ。

「不思議ねえ。真也くんがくることを知ってるみたい」

そのたびにエーバが、びっくりしたように言う。

「だって、いつもはポーチで寝そべってるのに、真也くんがくる日は、きまつて朝からお玄関のほうに移動してるのよ。……ほんと不思議なこと」

ほくが小さかったころからの仲よしだから、きっとチビには予知できるのかもしれない。犬ってテレパシーみたいなものを持つてるっていうし。どこか知らないところへ引っ越していった飼い主のところへ、何年もかかって、たどり着いたって話を聞いたことがある。ほくは飼い主じゃないけど、チビとは親友なんだ。

チビは、ほくが生まれる前からリーリんに飼われて、ほくが物心ついたころには、もうだいぶ年をとっていた。近くの駐車場ですずくまっていた子犬のチビを拾ってきたのが十四年前だそうだから、ほくより三歳以上も年上ということになる。

いや、リーリによれば、犬は人間とは比較にならないほど早く年をとるそうで、生まれて十四年なら、人間の年齢でいえば七十歳をこえてるんだって。

「チビは、わたしよりも年寄りなんだぞ」
と、リーリは楽しそうに言った。

「もっとな、だいにじてやうなまきやいかな」
それにしちゃ、じゃれるのが大好きな甘ったれだ。ほくがリーリんにいるあいだじゅう、ほくへはほりういて、ねえ、遊ぼうよ、とじゅう目で見上げてくる。

「誰とときかは、もつとやんちゃだったんだから」
と、エーバがダイニングルームの大きなテーブルを指さして言う。

「ほりう、この脚をよく見てくらん。ほうほうにキズがあるでしょ。みんなチビが噛んだあとなのよ。修理して、なんとかごまかせてるけど、ほんとに無残だったのよ」

ベッドぐらいいもある大テーブルは、ケヤキの木でつくられている。その円柱みたいなどっしりした脚が四本とも、チビのいたすらの犠牲になったんだって。

それまでチビは家のなかで飼われてたけど、その事件のすぐあと庭へ出された。なにしろ気がついたら、家じゅうの家具が牙や爪のあとだらけだったんだ。

どれもがリーリのご自慢の家具だった。じつは、そのほとんどがリーリ自身の手でつくられたものなんだ。——リーリは前に、家具をつくる職人だったんだそうだ。

いま、ぼくんちにある家具は、みんなリーリからもらったものばかりだ。

うちに初めての人が訪ねてくると、ママはきまって肩をすぼめてみせて、

「この食卓も椅子も食器棚も、うちのダイニングには不釣り合いな感じでしょ」
なんて言い訳っぽくつぶやくんだ。

「わたしの父が家具専門の木工所をやってるんで、あれもこれもと押しつけられたのよ。まあ、得したっていえば、そうかもしれないけど」

ぼくの勉強机や本棚やベッドも、リーリとエーバからのプレゼントなんだ。

どれもが木の素材を生かしたつくりで、専門的には「カントリー・ファニチャー」と呼ばれるものらしい。パパが教えてくれたんだけど、カントリーは「いなか」、フアニチャーは「家具」という意味で、つまり「いなかふうな飾りつけのない家具」なのだそうだ。ところが、これが、とても高価なんだって。機械まかせにしないで、人

の手で一個一個ひくられるかららしい。

そういえば、リーリんちにある家具は、ほとんどがカントリー・ファニチャーだ。チビが噛んだ大テーブルも、ケヤキの木目や木肌がそのまんま生かされて、ほとんど飾りが無い。だから、よけいチビの牙のあとが目立ってしまっただ。

でも、リーリがキス穴をふさいだり、紙ヤスリをかけたりにして修理したので、いまではよく見ないとわからない。

「リーリは、いまも家具をつくってるのっ」

と、いつか聞いたことがある。

すると、リーリは両手をテーブルの上でひろげて、てのひらを眺めながら、

「うーや、残念ながら、つくっちゃいないんだ」

そう言っ、静かに微笑んだ。

「わたしは工場ではなく、オフィスのほうで働いてるもんでね」

なんとなくはずかしそうに見えた。でも、ぼくの見まちがえだったんだろう。だって、そんなわけないさ。リーリは、井上木工所の社長なんだから。

前に、リーリに連れられて木工所を見学したことがある。

おとし、三年生の夏休みに「いろいろな仕事」という題の宿題が出た。好きな職業を一つだけ選んで、その職業の人たちがどんな仕事をしているのか、リポートすることになった。クラスのほとんどは、スポーツ選手とか消防士とかお医者さんとか、自

分のあこがれてる職業を選んだ。ぼくは、知らない人に会ったり話を聞いたりするのが苦手だし、面倒くさかったので、てっとりばやくパパの仕事に決めようとした。そうママに話したら、

「そりゃ、むつかしいかもしれないわよ」

と、くびをかしげた。

「だって、パパが大学の研究室でどんなお仕事をしてるのか、くわしくはママにだってわからないんだもの」

そんなことってあんなのになって、ぼくは思った。夫の仕事について、なにも知らない奥さんなんているかよ。でも、すぐ思いなおした。うちの場合はしかたないかもしれない。

なにしろパパときたら、うちじゃ仕事の話はまるっきりしないし、聞いたって理解できないってママは思ってるようだ。

「ねえ、真也くん。あなた、分子生物学なんて知ってる？」

と、ママはくびをかしげたまま聞いてきた。

「パパのお仕事ってね、ふつうの人にはむつかしい世界の研究なの」

毎日、電子顕微鏡をのぞいたり、コンピュータのキーボードを叩いたりして、DNAの組み合わせなんかを、数字や記号であらわしてるんだって。

そうなるよ、やっぱりぼくにもむつかしい。しかし、まいったね。自分の父親の仕

事を理解することが、なかなかできないなんて。

「もっとわかりやすい仕事を選んだほうがいいわ」

途方にくれていたほくに、ママが提案したんだ。

「木工所を見学させてって、リーリに頼んでみたら？ 家具づくりのお仕事なら、

じっさいに見たとおりでしょうから、レポートしやすいんじゃないかしら」

さっそく電話してみると、そうか、ってリーリは機嫌よく答えた。

「いっへん見せてやりたいと、わたしも考えてたんだよ」

夏休みに入るとまもなく、ぼくは前もって教えられたとおりに電車に乗って井上木
工所へ向かった。見学したいならひとりでおいで、とリーリが言ったからだ。

私鉄電車とJR山手線、さらにまた私鉄電車を乗りついで約一時間もかかって着
いたところは東京都と神奈川県境にある町だった。

電話で約束したとおり、駅の改札口でリーリが待っていてくれた。

「やあ、きたな。……あんまり遠いんで、途中で心細くなったかかね？」

からかうような調子で、リーリが言った。

「冗談じゃないよ、とぼくはひそかに思った。もう三年生なんだぜ。」

「じっさいのオレに、か、ひとりで行かれるようになったんだな。……前に工場にきたとき
は、オレを抱っこされてたね、わたしの顔を見て急に泣きだしたっけ」

「5<のときだ」

「おほえてないのかね。……あれは、もう八年ぐらい前になるか」

「なんだ、赤ん坊のときか」

そりゃ、おほえてるわけないよ。

駅前でリーリが手を上げると、黒い乗用車が近づいてきた。運転していた男の人が降りてきて、会釈しながら後部座席のドアを開けた。

リーリがぼくの肩を叩いて、さあ、乗った乗った、と言った。

さすが社長の乗用車だけあって、ママの乗っているクルマとはちがう。シートはふかふか、エンジンの音も静かなもんだ。

ぼくは、それだけでリーリを見直した。

木工所は駅から十分ぐらいたちどころにあった。リーリの話によると、多摩川のすぐ近くなので、昼休みには社員の人たちが川べりでバレーボールをしたり、昼寝をしたりするんだそつだ。

「さあ、着いたぞ。ここが井上木工所だ」

リーリが言ううちに、乗用車は道路から左に折れて門のある敷地へ入っていった。

クルマが二十台ぐらい入れそうな舗装された駐車場に、ホ口付きの大型トラックが三台停まっていた。その向こうに工場の建物が見えた。

ぼくらの学校の体育館と大きさも形もそっくりだった。大きな窓がたくさんあるの

も、屋根が丸っこくて明るい茶色なものと同じだけど、ちょっと体育館とちがうのは窓のならばかたから見て、二階建てらしいということとさ。

ほくはリーリに連れられて建物のなかへ入ってった。

仕切りのない、だだっぴろい屋内には、頑丈そうなピンポン台みたいな作業台や、ピカピカに磨かれた機械がいくつもならんでた。それらのあいだで、たくさんの人たちが働いてる。それぞれ板や角材を加工して、椅子や机や棚などの部品をつくったり、その部品を寄せ集めて組み立てたりしてた。

「あれはデパートから注文されたキッチン家具をつくってるんだよ。とても評判がよくて、予約がたくさんきてるんだ。……おかげで、みんな大忙しなのさ」

リーリが満足そうにうなずきながら言った。

「あちこちの家具店から注文したいって言ってきてるんだが、手がまわらないんだ。なにしろ、しっかりした製品をつくるのが、わが社のモットーなんでね」

組み立てられた白木の家具が、工場のあちこちに積み上げられてる。その先の工程へ進められるのを待ってるようだった。

どこから強い臭いがただよってきてた。ほくは思わず顔をしかめて片手で鼻をおおった。リーリが苦笑しながら覗き込んできて、

「慣れないと臭いがきついく、そのうすうす涙が尻へへるとだ」
と、工場の奥のほうを指さした。

「あそこで仕上げの塗装がはじまったんだよ。いちおうは大きな換気扇をまわして
るんだがね」

「みんな、平気なの？」

「慣れてしまってるんだな。……有害じゃないから、だいじょうぶだって」

そう答えてから、リーリはぼつんと言った。

「むかしは、……こんなじゃなかった」

「どんなだったの？」

「角材や板にカンナをかけたたりノコギリを引いたりすると、いい匂いがあるんだ。

それが木工所じゅうにただよってきて、うっとりした気分になったもんだ」

と、リーリは目を細めてから、すぐ思い直したように言った。

「ここで働いてる職人のほとんどは、家具づくりが好きなのベテランなんだ。もう二

十年以上も家具をつくっている人たちばかりだよ」

「そんなに長いあいだ、毎日、家具はつきりつくってんの？」

「そうさ。むかしは、わたしも一緒につくってたんだ。……もとをいえば、あの人

たちはみんな、わたしの弟子なのさ」

「へええ、リーリがつくりかたを教えたの？」

「ああ、……もっとも五十歳より上の人たちは、おやじの弟子だったんだがね」

「おやじっついで」

「わたしの父親だよ。……真也くんのひいお祖父さんよ」

「えっ、ほんと。ひいお祖父さんも家具をつくってたの？」

ほくにとつて、それは初耳だった。ていうより、ひいお祖父さんの話を耳にするこ
としたい初めてだった。そういえば、ほくのまわりで、ひいお祖父さんが話題になる
ことなんて、それまで一度もなかったんじゃないかと思っつ。

「じゃあ、リーリもひいお祖父さんから家具づくりを教わったの？」

「そうだよ。……三十年前まで一緒に仕事をしたのさ」

「なあんだ、ほく、知らなかった」

リーリにお父さんがいて、そのそばで教わりながら働いてたなんて。そんなこと想
像もできなかった。だって、ほくにとつてリーリは初めっからお祖父さんなんだもの。
「ひいお祖父さんも、ここで家具をつくってたの？」

「いや、そうじゃない。……さて、こんどはオフィスへ行ってみようか」

いきなり話を變えて、リーリは歩きだした。機械と作業台のあいだを縫っていくあ
とを、ほくはあわてて追いかけた。ひいお祖父さんについて、もっと聞きたかったん
だけど、リーリにはその気がなさそうだった。

二階のオフィスに連れていかれ、そこにいた秘書のお姉さんから冷たいジューズを
ごちそうになった。すると、ほくはひいお祖父さんのことを忘れてしまった。

そのあと、お姉さんが二階にある展示室を案内してくれた。井上木工所が製作して

る椅子、テーブル、食器棚、本棚など、いろんな種類の家具が陳列してあった。お姉さんの説明によると、どれもがカントリー・ファニチャーで、塗料の色はさまざまだが、自然な木の感じをそのまま活かしたものなんだそうだ。

ぼくはママに借りてきたデジカメで、そのうちのいくつかを撮った。もちろん、帰りがけに工場で、作業中の人たちとつくりかけの家具を撮るのも忘れなかった。

それで一時間の見学を終えた。

リーリがお客さんと話をしてたんで、ぼくはひとりで乗用車に乗せられて駅まで戻ることになった。秘書のお姉さんが微笑みながら、

「気をつけてお帰りなさいね。またどうぞ」

と、見送ってくれた。

夏休みの宿題の「いろいろな仕事」は、ぶじに書き上げることができた。

家具づくりの職人さんをテーマにしたのは、大勢の同級生のなかでも、ぼくぐらいなもんだろう。

へつに先生からほめられたわけじゃないけど、あの宿題はきつと長く記憶に残るにちがいない。なにしろ秘書のお姉さんは、いまでも忘れられないぐらい美人だった。

その後、なんどもリーリに会ってるけど、木工所へ行ったときのことを話したおぼえがない。どうだったの、と感想を聞いてきたのはママだけだった。

じつは、ぼくは内心びびくびくしてたのだ。

「真也くん。大きくなったら、リーリの木工所で働かないか？」

そう言われたら、どう言って断ろうかと思ってた。

「ひとり娘のママが畑ちがいのパパと結婚したから、リーリの仕事を継ぐ人がいなくなっちゃったわ」

と、エーバが言うのを、ぼくはなんども聞いたことがある。

そのとき、真也くんが継いでくれるといいねえ、とも言ってたんだ。

やだよ、そんなの。わるいけど、ぼくはサッカーで生きてくんだから。